

イラストレーター・コミック作家

わたせせいぞうさん

「イラストレーター」わたせせいぞう氏。その名前は知らなくとも、その描いた絵をみれば、「あっ、見たことあるぞ!」と思う会員も多いのではないかと。胸がキュンとするようなストーリーと、格好いい男女が登場するカラフルなイラスト。そのファンは多い。先日、カンボジアに学校を建てる企画のTV番組にも出演され、ご本人もとてもスタイリッシュである。

早稲田大学法学部を卒業後、損保の営業マンとして抜群の成績を残しながらも、週末には週刊モーニングに連載する「ハートカクテル」を描く。そんな二足の草鞋を履く渡瀬政造氏が「わたせせいぞう」一本でやっていく決意をするときがやってくる。

(聞き手・構成：秋田 徹，臼井一廣)



わたせさんの職業

ボク(の青春)にとって、わたせさんは、週刊モーニングに連載された短編漫画「ハートカクテル」の作者さんです。ご自分では、ご自身のお仕事をなにごだと思っ
ていらっしゃるのですか。

「ものをつくる」という意味で、クリエイターだと思っています。常に、「いいものをかこう」と心がけています。

わたせさんのクリエイターとしての創作活動にはいろいろなスタッフさんが関わっていらっしゃると思います。例えば、レンブラントでいえば、「レンブラント工房」というものがあり、レンブラント自身の各作品への関与の度合いは様々だとされています。クリエイターとしてのわたせさんは「職人」なのですか、それとも「プロデューサー」なのですか。

両方の面があります。「職人」でもありますが、チームプレーも必要で、たしかに役割分担はしていますね。アシスタントには資料集めや背景をお願いしていますが、ストーリーを考えること、どこにどの色を入れるかの判断は私がしています。

わたせさんの作品，作品づくり

わたせさんの作品は、ストーリーと絵がとても印象的です。ご自身では、とくになにを重視していらっしゃるのですか。

やはりベーシックはストーリーです。短編漫画はもちろんそうですし、1枚のイラストであっても、「なぜここにこれがあるのだろうか?」とみる人が立ち止まってくれるようなストーリーが必要です。また、「間」が大切です。たくさんの色を使ったとし

でも、「余白」をつくります。日本の伝統美術もそうです。例えば、円山応挙には「竹雀図屏風」という襖絵があるのですが、6枚のうち1枚には、何も描いていない。なにも描いていない1枚があるからこそ他の5枚が生きるのです。

ぼくたち弁護士もそうなのですが、やはり締切りに追われた日々を送っていらっしゃるのですか。

締切りを意識したら、かき始めるということはありません。しかし、締切りが近いのに「かけない」ということはありません。プロですから。ただし、もっと時間があればもっとよいものが「かける」と思い、締切りを延ばしてもらうことはあります。

失礼な質問で恐縮ですが、わたせさんは、1945年2月生まれでいらっしゃいます。役者であれば、加齢とともに「なかなか台詞が覚えられなくなる」ということがあるようです。わたせさんは、年齢的な限界を感じたことはありますか。

ありません。自分の限界を感じたら、アウトです。旅行に出かけたり、美術館に行ったりして、感動する。とにかくインプットすることを心がけています。

どのようにインプットするのですか。

道を歩いていると、良いシーンが思い浮かびます。常に色を意識しながら、自分の目で見る。季節を感じる。私は、作品の中で季節を楽しんでいます。それと、よく写真を撮りますね。作品には「外枠」が大事ですから、撮った写真を参考にして構図を決めることがあります。

わたせさんは、神戸市生まれ、小倉育ち、学生生活を東京で送っていらっしゃいます。ご自分の作品に「生

まれ育った町」や「少年時代」は影響を与えていますか。

港の近くに住み、海が近くにあったことはたしかです。子どものころ、母がとても教育熱心で、私に全科目の家庭教師をつけました。しかし、父は、祖父が医師であったにもかかわらず、絵描きになる夢をもっていました。結局、父はサラリーマンになるのですが、趣味で画集を出したり、俳句をやったりしていました。その父が、子どものころの私に絵の先生をつけてくれたのです。先生は、「もっと見てごらん」と言って、何度も何度も私にりんごの絵を描かせました。あるとき、私は、光と影があることに気が付きました。そして、じっくり観察してリンゴを描いたら、先生からOKがもらえた。そんな思い出が強く印象に残っています。

わたせさんの転機

わたせさんはサラリーマン生活を送りながら漫画制作を始められ、1973年に第13回ビックコミック賞に入選、1983年から「ハートカクテル」の連載を開始し、1985年に創作活動に専念されました。まず、サラリーマン生活は、どのようなものだったのですか。

私は、大学卒業後、東京で、損保のサラリーマン（営業）をしていました。数値目標を立て、チームプレーで目標を達成していく。部下にめぐまれ、営業成績も良かったですよ。月曜日から金曜日までは損保の営業の仕事に専念する。代理店さんとは、夜遅くまでよくカラオケに行きました。そして、土日は、絵に完全燃焼していました。もちろん会社の許可をもらって創作活動をしていたのですが、凄いエネルギーだったと思います。

なぜそのサラリーマン生活にピリオドを打つことになったのですか。

私が弁護士を描くとしたら、
「この事務所に相談に行きたい」と
思わせるものにしたい。
キャラクター次第ですね。

わたせせいぞう

40歳のときに、あこがれの企画業務部門への辞令が出ました。私としては栄転でしたが、会社としては、どちらかへの決断を促したのかもしれませんが。私としては、二足の草鞋を履くことに限界を感じていたものの、妻と小学生と幼稚園児の子ども二人がいたので、悩みました。3人の占い師にみてもらったところ、3人とも、「会社を辞めたら、2年後には一家離散する」という結果でした（笑）。しかし、45歳の自分、50歳の自分を想像してみると、「絵の近くにいなければ絶対に後悔する」と思ったのです。父母も妻も、私が創作活動に専念することに賛成してくれました。

会社へ辞表を提出後、後悔したことはありませんか。

ありません。月曜日から日曜日まで、ずっと絵がかける。朝日が眩しく、風を感じる。とにかく毎日が「楽しい」のです。

わたせさんの作品と弁護士

わたせさんは法学部のご出身です。わたせさんにとって、弁護士はどのようなイメージですか。

私にとっては、「評決」のポール・ニューマンですね。身近に感じません。商標の関係で、弁理士さんとの接点はありますが、仕事上で弁護士さんとのお付き合いはありません。

わたせさんの作品に弁護士が登場したことはありません。これから登場する可能性はありますか。

キャラクター次第ですね。面白い原作があれば、登場させたいです。私が描くとしたら、「この事務所に相談に行きたい」と思わせるものにしたいです。ぜひ原作を書いてください。

*わたせせいぞうさんの作品を表紙裏に掲載しています。

プロフィール わたせ・せいぞう

1945年2月15日、神戸市生まれ。北九州小倉高校卒。早稲田大学法学部卒。都会的な男女のショートストーリーを、スパイスのきいたセリフと透明感のあるイラストレーションで、“見せ読ませるコミック”を確立。第33回文藝春秋漫画賞を受賞。著書に『ハートカクテル』『ハナドキロード』『菜』『ハートカクテル eleven』『The Motorcycle Letters』『Sea Side Story』『菜～ふたたび～』全3巻など多数。『季刊びあ』の表紙イラスト。『北のライオン』（モーニング）、『千代の茶屋』（コミック『乱』）連載中。他広告多数。